

神学館バリケードの提起した課題は何であるか？

(はじめに)

「旧約聖書の思想では、神は歴史の中に啓示される。そして、歴史の中に人間の救済があり、歴史を感える状態の中に救済はない。人間は歴史の存在である。また人間の救済とは人間の解放であり自由である。神は神話的表現として、歴史に受肉し歴史を主導し変革の中に働く神である。神が希望となり神が導くべきである。歴史の過程において、変革の志向の中で、人間は自由である。ラジカルとは人間の根源的な闘争のものである。神学とは、宗教形態としてのキリスト教や教会の教義を以てあるのだから。神学とは、あらゆる人間を以てするものとしての思想であり、人間の存在及び更新に関する思想である。それは、諸学問の全体制において他学問と同様でなく、学問全体の中で位置づけられ、諸学問との対話、対決、関連における一環でしかない。また現代においては、オーストリアの秩序、学問、イデオロギイが崩壊しつつある状況は、神学の存在そのものが問われてはいる。知性としての神学も、いすこしか去れ。

我々が歴史的存在であり、余白として個別的な実存し神学的更新の過程である歴史の過程で臨む問いは、何であるか。現代においては、もはや資本主義の矛盾と危機の境目があり、人間の向背を規定している現在、我々は社会の向背を抜きにしてあり得ない。守りながら、個人といつものが全体性、社会性においてあるからである。我々の今日までの護り方は、歴史や社会の向背に客観的な認識を以てして、その向背が人間の向背に神学的向背をも規定していることを志し、て、現代の秩序、制度、イデオロギイの側面と規則として旧態依然としてあるキリスト教や神学を序んできたことである。しかしながら、序の語句、60年、此の終焉の序や今年度の神学館バリケードが提起した課題は何であったらうか。これらのことは単なる現象的向背や一時的な一回限りの向背ではないし、神学部だけの改良的向背ではない。60年関係、70年関係という歴史の要約は、現代過渡期世界を人間の向背、全体の向背の相対的向背として提起しているのか。この情勢と状況の中で、我々は生きてゆくし、理想と実践の理想化

を試みなければならない。古くは神話的時代から現代へ大人した時代へ、人間の歴史の過程において人間の歴史の課題を担い、人間の解放を以てして争いつづけてきたし、争いつづけてゆく。意味と矛盾といふ人間の現実がある限り、… 救済と変革の争いは続く。人間の救済は、歴史の過程の中に存在しつづける。

我々の争いは、常にまたその歴史の時代、また、11ニズムの時代、70年関係にせまりくる情勢の時代で系統的に社会的課題としてある。

一、此のR斗争の課題 (参考資料)
①現代といふ歴史の状況の中で、神学的研鑽の場としてのRの存在の意味が流れてはいる。過去此のRはMへの参加、敵しい神学的復讐を媒介して行われしてきた。60年関係といふ歴史的要約は、此のRは様々な意識の分裂をひき起こした。そして、それはキリスト教的ヒューマニズムが更生を結集し、Mに参加させる過程で、Mの自的転換をともない、Rに与える統一が保たれ、一程に深刻化した。この争いは、状況の中での、神学Rとしての特殊な存在意義ではないことが明らかである。てきたのである。

②大層全体の厚生施設、貧困の中で神学生の特権が存在するといふこと自体がおかしい。
③この争いは、神学部教員といふ一つの学部の教育の針に對したものでして生まれた。そして、教授会の自治Rへの干渉は、昭和初年7月文部省「序進厚生留校会若甲に台致し、昭和初年厚生自治法初への廿教育審判人高志を請うている。個人主又的ブルジョア的思想と流を排し、神学的思想は、主観的意向はどうか、自主自治手続として現われたい。この争いは、争いに対する文部省の反応又政策そのものに對する争いであり、それと迎合し、序と同一といふ大層権力者に対する争いであった。

④西正性メモメントを保持し、合理的に秩序を設けし肯居してゆく思考は、近代合理主義と背かかれ、個人主義を以てのもの思考である。管理者は、事態の最もラジカルな向いかけがわからず、いざづらに收拾の論理を提出し、向背をその条件へ遷えする思考がこれだ。しかし、

この論理に対して、我々は無力であったことを反省し、多くの学友の退学を痛しとして受けとめつつ、この以降、我々自身が自らの責任を隠蔽して来たことを自己批判し、教団自身も幻想的な甘い言葉で神学部再建・神学部長同体によって我々を「まかして来たことを謝罪しなげればならぬ」。

二 大学院登録拒否斗争 (資料参照)

此者以斗争が、今年リトリートの「同志社大学における神学教育に関する理念の問題として」学生参加という反動的な本一でのもとに収拾して以降、再び隠蔽されてい

た矛盾が対象化されて現れた。具体的には、教化学・教化学特講というカリキュラムの個別改良の問題を媒介としながら、現行カリキュラム全般の問題として登録拒否が闘われた。その内容は、学問論及び大学論の問題である。(資料「又即省文政策批判」論議「我々の闘いは神学部の現行カリキュラムによって表現されている」学問論の内実そのものに向けられている側面と現行カリキュラムが同志社官僚体制に組み込まれている「教授会」によって最終決定されていくという面の二面性をもっている。そして、それはささしく近代合理主義というブルジョアイデオロギーとブルジョア秩序を肯定した側面として存在している。我々の個別カリキュラム問題は、その根柢にはカルゴアジートの対決を必然化し、現代は教団と政治的又即省に規制された大学の「大協・私大連」の共同路線との対決へと発展しなげればならぬ、質を有している。

三、学部授業放棄レクラス討論の斗い

様々な矛盾と課題を持ちながら、秩序と現行制度を暗黙のうちに認めてきたことを我々は自己反省し、院生の斗いを支持する中で、教団会に対する「公開質問状」を提出した。我々の闘いは、(1)現代資本主義社会における民主政府の帝制主義としての反動的な侵略的又政策や行政的的シカム化への動向という情勢の中で、特に戦後からそのような政治を必然化して来た要保体制及び70年要保条約に対して如何に対処するのか？(2)日教団占領政府と即省に規制されて存在している大学は、現在の情勢においてどの再編の「環」として帝制主義的に再編されている。特に、同志社大学の「大同志社理想」田辺町移転問題には、学館・R内題以上に大学の帝制主義的再編を完徹し、実現するものである。(3)こうした情勢の中で、大学の学問カリキュラムもブルジョア配下で

ブルジョアイデオロギー的側面を有している。さらに、神学部においては、そのようなブルジョアイデオロギーに迎合する教団・教員・既成教会の牧師養成機関ではない。具体的には、カリキュラム全般に渡って、此者以斗争の歴史的内容をふまえて考える必要がある。特に、演習・レポート・授業全般問題である。このことである。神学は、我々の情勢と無関係に学問性・思想性として存在するものではない。神学部が、国家権力や大規模力の規制の外に存在するものでもない。我々は、自己の責任・対象化された矛盾との止揚すべき闘いを展開する過程においてしか、闘争主体・学問主体・人間としての学問性・思想性を確立することはできないのである。

教団会の回答は、全く無回答であった。自己の主体と抜きにして、自己批判・根本的検討・批判的討議という言葉を講じたにすぎなかったのである。

我々は、全く教育方針・行政方針・情勢への対応を待たない、教授会に決定した現行カリキュラム制度を拒否し、授業放棄レクラス討論を行った。また、不十分ながらも、研究会等を通じて行った。

10月開ストライキの内情(自治会合資料参照) 我々の自治会運動は、現在の情勢の中で、単なる「平和」と民主主義・よりよい学生生活」という運動を乗り越えて、闘争運動を展開して来た。帝制主義・国家権力に對する闘いは、それは街頭ラッパカリズムとしてではなく、昨年の10月、防衛庁・新橋・御道筋、さらに東大要田・神田カレッジ・中野区と、た地区占拠・地区暴動地区マ

ンセント・中央校の型で斗われている。

4月5日、防衛庁ストライキは、政治斗争として、26日、闘争的又即省に規制された自治会連立入り首郡占拠斗争と、要保メーデーと斗う、闘争者であった。それは、街頭地区における国家権力への闘いを生かす攻撃的なバリケードであり、大学権力に対する闘いでもあった。

中野区要保条約(資料参照)は、首相官立に中央校への要保をめぐり、その斗いとして斗われた。しかしながら、大学への権力の介入と霞ヶ関一帯の制圧といった国家権力の弾圧は、我々の斗いを新橋・銀座の暴動に押し止めたのである。我々は、莫大な大衆のエネルギーを中央校に放棄させ得なかった。一定の敗北を認識しつつも、この斗いを要保口、ASPCA以外相訪米・佐上訪米の斗いへ進撃するであらう。

五、各 部長・教務主任団交(資料)教授会団交記録
10日間バリケードは政治斗争との結核点を打ちつつ、

学部問題の資料作成・研究会・全体の学問の統体における神学的学問性・思想性を追求する場であった。我々は、その過程で団交を認識し、神斗を中心に行なった。団交において教授が語ったことは何であったらうか。

教授会は、60年保留し此有尺斗身し現在までの歴史的統結を全く成し得ないまま、また教育理念も教育の針も現行カリキュラムの思想と位置づけをも拘らねいままに、団交に对应して来たのである。教授が語ったことは「確かに学生の提起した矛盾や課題はある。しかし、現在の秩序や制度を認めた状態が、改良し検討してゆくことではないか」ということである。彼等は、此有尺斗身における收拾の論理と否定性を持たない近代合理主義を、再び提おして来た。そして、教授の言葉は、主体性との知性であり、知的な学問がしかほい。理論と実践が分離し、行動の論理をもたない観念と知性の遊びが学問なのか。

我々はこの斗い、が、体制の秩序・制度・カルゴアイデオロギイの否定がある限り、斗いの過程で批判大学・批判学問を確立してゆくべきである。

六、神学館無期限バリケード斗争
以上の闘いの過程で明らかになって来た矛盾と課題に對して我々は、日限権力に對する攻撃的なバリケードとして中央権力・街頭に進撃し、同志社大学の権力構造を暴露しつつ全学的な大学権力中核への斗いを発展させ、自らの学問を現代の情勢を相うるものとして高めあげたためにバリケードを永続化した。

(報告) バリケード斗争
①資料作成・研究会
a 大学論 b 全共斗運動 c 同志社大学問題
d 同僚情勢・日限論
②自主講座—講演とパネル
5月21日 4時—神学部解体
の必然性
南東学院大学教授 高尾 利数氏
講演

③クラス討論会
5月21日/時—3時(各学年別)
④サークル研究活動—理論的研究
各自が提起してやってみよう。

5月22日理事長総長団交に
結集しよう

大同志社社想より田辺所務部へ
法人同志社理事長会
を打掛し、大学入帝口主義的再編り大学秩序法、中政
を審中物候へ

遠藤学長代行をはじめ、各部長は、学友会入再三再四の公同質問状と、田辺要求を拒否して来たが、我々の政治主張の前に敗れ、9日、団交に同意し、再編りされるを認めた。しかしながら、当局は、またも、2000名にも及ぶ大衆入前に於て、自らの論理と政治方針を、自行政、大学行政方針を保持して、その同意を聞かせることができなかったものである。

国家独占資本の政治的部門が大学支配とその権力構造に組み込まれ、当局官廳支配の教授会に臣服化支配—日限権力、大学理事會支配の多岐—の中で、現行カリキュラム、大学教育の矛盾、我々学生の学問主体の矛盾として露呈している。国家独占によって増進された政治的部門の大学支配は、再口主義的再編りの一環として露呈されている。近年大衆化の流れは、その露呈の内容は、日限権力と大連、共産階級として、また、この二つは大学の教育制度、行政方針の再編として現象化した。田辺所務部計画は、この二つは大学政策によって相対される二つの大学の再口主義的再編を完徹するところの大同志社社想の裏現である。

資本主義社会と国家体制に在りては、イデオロギイ技術の養成機関としてこの大学は存在し得ない。この二つの矛盾と危機は、同志社大学の表裏を表現する。我々の田辺所務部は、大同志社社想の再編りの斗いに対して、当面は「知らずして」云々で、自らの無能な支配権力入限体を暴露した。しかし、学友諸君、同志社入権力中核は、当局、部長、部長会では「二」を知って鋭い。同志社権力入中核は、法人同志社理事長会である。我々は、対法人同志社理事長会を打掛し、5/22に設定した。我々は、この斗いを通じて、日限権力条件との斗いへと進撃していかねばならぬ。大学への確立政策は、中政、中政、大学秩序法物候を再口主義権力打掛に向けて...